

特集「データエンジニアリングⅣ」の発刊に寄せて

向 井 丞

2015年4月に日本ユニシスグループは新中期経営計画「Innovative Challenge Plan」をスタートさせた。新中期経営計画では「デジタルイノベーション」、「ライフイノベーション」という二つのチャレンジ領域と、それを支える「ビジネス ICT プラットフォーム」という一つの変革領域を重点戦略に挙げ、さまざまな施策を実行してきている。「デジタルイノベーション」では、国際ブランドプリペイドカードのチャージポイント事業や進化型 CLO (Card Linked Offer) サービスなど利用者視点のサービスを提供し、「ライフイノベーション」では、クラウド型保育支援サービスや地域医療・介護連携ネットワークなど生活者起点のサービスを展開している。これらは、各々、決済データ、購買データ、人の成長データ、医療データというように、近い将来、有益に活用できる可能性のある多くのデータを取り扱っている。

「ビジネス ICT プラットフォーム」では、これら二つのイノベーションをスピーディーに展開するための基盤強化を行っているが、特に、ビッグデータ分析に関しては、データ活用基盤「データ統合・分析共通 PaaS」を発表し、データ分析ニーズに対応している。加えて、種々のセンサー情報も活用できるよう、IoT (Internet of Things) ビジネスプラットフォームの開発にも着手した。

総務省「平成 26 年版情報通信白書」によれば、2005 年から 2013 年の 8 年間に我が国のデータ流通量は約 1.6 エクサバイトから約 13.5 エクサバイトと 8.7 倍の伸びを示しており増加の一端をたどっている。特に防犯・遠隔監視カメラデータ、センサーデータは全体の約 81% を占めており、IoT の世界であらゆるものがつながり、そこから発生するデータが増加している。従来のビジネスデータに加えて、これら IoT から発せられるデータを活用してビジネスを創発し、既存ビジネスを改善することが企業経営でも急務となっている。

技報では 2009 年に最初にデータエンジニアリング特集号を発刊し、これまで 3 回にわたって本テーマを継続的に取り上げてきた。この 5 年の間に当社でも IoT データを活かして災害監視カメラサービス「サイカメラ ZERO」やドライブレコーダサービス「無事故プログラム DR」、EMS (Energy Management System) である「UNIBEMS」などを開始し、各サービスから日々大量のデータが発生し活用されている。日本ユニシスグループは、IoT 時代に必要となるデバイス開発技術、ネットワーク技術をユニアデックス、またデータをビジネスに活かすシステム・サービスを日本ユニシスが担い、お客様にワンストップで技術とサービスを提供している。

本特集「データエンジニアリングⅣ」では、「データエンジニアリング」の技術だけでなく、スマートメータやソーシャルデータなど多様なデータを活用してビジネスを創発、改善した具体的な事例を紹介する。本特集号が従来の「データエンジニアリング」技術に興味がある方々だけでなく、多様なデータでビジネスを創り、変えたいと考える方々の参考になれば幸いである。

(代表取締役常務執行役員)